

2023年台湾における体育・保健体育科教育の現状 —台北, 新北, 台中地区の実態調査から—

佐藤 豊¹⁾, 林田 はるみ²⁾, 井口 成明¹⁾, 本多 壮太郎³⁾, 木原 慎介⁴⁾, 清田 美紀⁵⁾,
浜田 幸史⁶⁾, 岩崎 敬⁷⁾, 掌 慶維⁸⁾, 中田 真美⁹⁾

The current status of health and physical education in Taiwan in 2023: Insights from a Survey in Taipei, New Taipei, and Taichung Districts

Yutaka SATO¹, Harumi HAYASHIDA², Nariaki IGUCHI¹, Sotaro HONDA³, Shinsuke KIHARA⁴,
Miki SEIDA⁵, Koji HAMADA⁶, Takashi IWASAKI⁷, Ching-Wei CHANG⁸, Masami NAKATA⁹

要旨：本研究の目的は、これまで訪問調査を継続してきた台湾における体育科教育の経年的変化と現状から、日本の体育科教育について示唆を得ることである。

そのため、1) 台湾における体育科教育の変遷、2) 経年調査項目から見た学校現場の実践、3) 日本の多様な教育実践者からみた分析という3つの視点から現状を概観し、日本の学習指導要領の実施とその課題について示唆を得ることを試みた。

2023年3月6日～9日において、台中、新竹、台北の小中高6校の現地調査を実施した。その結果、次の点が明らかとなった。

学校視察によって、地区ごとに、①教師主体を中心とした技能重視の取り組み、②核心素養に着目した取り組み、③核心素養を方向的目標として捉えつつ、体育の指導内容(重点指導事項+身体素養)を中核とした取り組みに概ね分類された。①核心素養+体育内容、②技能重視型、③核心素養の順に、授業観察による期間記録の分析、観察者キーワードの分析からも体育としての資質・能力の育成に高い評価が確認された。

上記の結果から、日本においても「学力の3つの柱」の育成に向けては、「資質・能力」を方向的な目標ととらえつつ、体育の指導内容で示された「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の内容をバランスよく育む指導を充実することで、「教科としての本質」を見失わないようにすることが適切と言えよう。

一方、教師主導、生徒主体の指導を二項対立で捉えるのではなく、ICT活用を含めた様々な指導スタイルを効果的に組み合わせ、学習の主体性を生徒側から育む指導が求められていることが示唆される。

キーワード：台湾体育科教育、台湾体育授業、核心素養、指導スタイル

Abstract : The purpose of this study is to obtain suggestions for the future of physical education (PE) in Japan based on analysis of changes in PE policies, curricula and practices in Taiwan over times and the current situation. For this, the current situation was reviewed from three methods: 1) literature reviews of PE policies and curricula in Taiwan, 2) observation of PE classes and interview with teachers in Taiwan and 3) analyses of the observations by Japanese PE

1) 桐蔭横浜大学スポーツ科学部

2) 桐蔭横浜大学現代教養学環

3) 福岡教育大学大学院教育学研究科

4) 東京国際大学人間社会学部

5) 環太平洋大学体育学部

6) 鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系

7) 日田市立高瀬小学校

8) 國立臺灣師範大學體育與運動科學系

9) 國立臺灣體育運動大學體育學系

1. Toin University of Yokohama, Faculty of sports science

2. Toin University of Yokohama, School of Arts and Sciences

3. University of Teacher Education Fukuoka, Graduate School Research Divisions of Education

4. Tokyo International University, School of Human and Social Sciences

5. International Pacific University, Department of Physical Education

6. National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Faculty of Sports Humanities and Applied Social Science

7. Hita Municipal Takase Elementary School

8. National Taiwan Normal University

9. National Taiwan University of sport

researchers and practitioners. Field surveys of six elementary, middle and high schools in Taichung, Hsinchu and Taipei were conducted from March 6 to 9, 2023. The results are as follows.

Initiatives are generally categorized into 1) teacher-centered initiatives that emphasized skill improvement, 2) initiatives that focus on core competencies, and 3) initiatives that focus on important teaching matters and physical literacy which considering core competencies as directional goals.

The results of analysis of PE classes observation records and descriptions by observers conformed that the development of qualities and abilities in PE was highly evaluated in the following order: ① Core competencies + physical literacy, ② skill-oriented type and ③ core competencies.

From the above results, in Japan we well, while considering 'qualities and abilities' as directional goals, it would be appropriate to ensure instructions that fosters well-balanced contents of 'knowledge and skills', thinking, judging and expressing' and 'motivation to learn and humanity' in PE without losing sight of 'the essence of the subject'.

In addition, there is a need for instruction that effectively combine various instruction styles, including the use of ICT, and fosters students' independence in learning is suggested rather than viewing teacher-centered and student-centered instruction as binary opposition

Key words : Physical education pedagogy, PE classes in Taiwan, Core competencies, Teaching style

1. 背景

日本の学習指導要領(文部科学省 2017a; 2017b; 2018)は、2017～2018年に改訂が行われ、その特徴として、生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」等の涵養というキーワードを強調している。これらは、「資質・能力の3つの柱」と称されている。学習指導要領の構成は、「目標、内容、内容の取扱い」の3つの項立てによって示されているが、今回の改訂で、全ての教科が「資質・能力の3つの柱」を軸として再整理された。

また、前回改訂から踏み込んだ特徴として、これまでの「何を学ぶのか」を主に示してきた学習指導要領から、「何ができるようになるのか」という学びの成果、「何を学ぶのか」で示される内容の構造化や明確化、「どのように学ぶのか」で主張される主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)の視点からの学習過程の改善というメッセージが示された。学習指導要領の「指導の基準」を具体的に解説する「学習指導要領解説」のレベルでは、指導上の留意点として「どのように学ぶのか」について、指導の工夫や個別支援の手立てまで記載されたことも特徴として挙げられる。

着目すべきこととして、「何を学ぶのか」について、「学びに向かう力、人間性等」の、「目標」は、各教科で記載が見られるものの、「内容」では、ほとんどの教科で、具体的な指導事項は示されていない。このことは、成果である「何ができるようになるのか」を示す観点別学習状況を用いた評価において、「内容」に示されていない指導事項を評価することとなり、学校現場において、「学びに向かう力、人間性」の評価指標(いわゆる評価規準)の設定に苦慮する状況も見られる。

一方、体育分野については、2009～2010年改訂から、

内容としての「態度」を示しており、「学びに向かう力、人間性等」として引き継がれており、スポーツを通じた非認知能力の育成をこれまでも重視してきている。

これらは、OECD (Organization for Economic Co-operation and Development: 経済協力開発機構) レポート (2019) において、保健体育のナショナルスタンダードの内容についての18か国の国際比較では、身体的成果と身体的健康(18/18)、心理的・情意的成果および精神的健康(16/18、エストニアとロシアを除く)、社会的成果(16/18、オントリオ(カナダ)、ロシアを除く)、認知的成果(15/18、香港(中国)、ロシア、トルコを除く)、ライフスタイルの成果(18/18)となっており、体育学習において、情意的側面の教育が広く採用されている方向性に一致している。

これまで、筆者らは、林静萍氏(国立臺灣師範大学教授)ほか台湾の体育科教育グループとの学術交流を深めてきた。九州体育保健体育ネットワーク研究会においては、2015年に陳玉枝氏(国立臺東大学教授)を招聘し、世界の体育の危機を共有する「アジアの学習指導要領の変化と日本の課題」をテーマとしたシンポジウムを開催した。これをきっかけに台湾の教育事情について調査を開始した。翌年、2016年に2015年報告の検証のための台湾教育部体育署へのヒアリング及びナショナルスタンダードの学校現場の受け入れと実施状況やその成果と課題を確認するために台北市、新北市小中学校を現地調査した。

また、2018年には、桃園市、新北市、高雄市の小中学校の現地調査を通して、台湾各県の体育授業の実施状況及び日台両国の体育・保健体育の国の政策、それらを踏まえた教員養成、教育課程等の動向について意見交換を行い、台湾体育科教育の変遷を確認してきた。

本研究では、これまでの研究者の招へい及び現地視察から蓄積してきた知見及び2023年に実施した台中、新竹、台北エリアの視察から、台湾のナショナルスタンダードの目的を達成するための構造及び実際の授業の分析調査に

よって、台湾におけるナショナルスタンダードの理解及び指導内容の実際について、日台の体育指導の共通性や相違点を分析することで、日本の次期改訂に向けた具体的な手がかりを得ることとした。

同時に、学習課題、体力、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）、日本におけるICT活用のねらいである「個別最適化、協働的な学びの促進」の状況や具体的な方策、活用に向けての課題を浮き彫りにすることで、日本の体育・保健体育科教育への授業改善への示唆を得ることとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで訪問調査を継続してきた台湾における体育科教育の経年的変化と現状から、日本の体育科教育について考察し、「台湾における体育科教育の変遷」「経年調査項目から見た学校現場の実践」「日本の多様な教育実践者からみた分析」という3つの視点から現状を概観し、日本の学習指導要領の実施とその課題について示唆を得ることとする。

3. 研究方法

- 1) 本研究は、継続的に訪問調査を実施してきた台湾の教育動向について再整理し、2023年訪問における調査の観点を明確にする。
- 2) 訪問校において、継続的視点からのヒアリング項目及び授業観察シートにより、「経年調査項目から見た学校現場の実践の変化」「日本の多様な教育実践者からみた分析」の二つのアプローチにより、台北、新北、台中地区の実態調査から2023年の台湾における体育・保健体育科教育の現状を概観する。

4. 研究内容

4.1 台湾における体育科教育の変遷

4.1.1 2015年における台湾の体育科教育の動向

2015年調査報告の概要を示す。台湾の出生率が2008年で世界最低となり、少子化の状況がみられるとともに、インドネシア、フィリピン、ベトナムなど東南アジアからの移民が9.7%を占めていることから、文化的構造が変化している。

教育に関する問題は、PISA (Programme for International Student Assessment) 調査の結果、数学、理科の学力は十分満足が行く結果であった反面、55%の中高生は学習意欲が低いなど、学習意欲、学習の関心、自分自身に対する自信などに課題がみられる。体育の指導については、体育を専門として養成された教師の不足と、体育の授業時数が十

分ではないという課題がみられる。

これらを背景として、2018年の施行に向けた12年基本教育カリキュラムの策定が検討されていくこととなるが、基本方針は、1. 生徒個々の能力に対応したカリキュラム、2. 生徒を学習者の主体とする（学習意欲の向上）、3. 多元的で柔軟なカリキュラムという方針に基づいている。カリキュラムに関しては、多角的、統合的な体育のカリキュラムについては、特別支援や障害者体育などの研究の必要がある。指導論に関しては、質の高い体育を行うための教科に関わる指導の在り方について研究をしていくこと、教師教育に関しては、実践的なトレーニングの在り方や、効果的な研修の在り方に関する研究を進めていく必要があるとの見解を確認している。

4.1.2 2016年台湾教育部体育署（葉丁鵬局長他）説明による学校体育施策の要点

学校体育の価値は、元々は「身体活動」ということのみであったが、社会変化に伴って、「全人教育に不可欠な要素」や「生涯にわたり学習する権利」、さらには「競技スポーツの基礎」、「国民健康の基盤」や「文化継承の場」といった多様な価値を含むようになってきている。

2013年9月に「体育スポーツ政策白書」が公布され、その中では「学校体育の活性化と子どもたちの活力向上」という学校体育の目標が掲げられた。その目標を達成するためには、体育行政に関する法令や組織体制の整備、学校体育の専門的人材の育成、学校体育基盤の充実、国民の運動習慣の確立と生活の質の向上などが必要不可欠であるとしている。

2015年の「学校体育統計年報」によると、小学校で体育授業を担当する教師の約60%は、体育を専門としていない（体育学士を有さない）という現状があり、同様に中学校では約5.6%、高等学校では約2.9%、大学では約2.2%が体育を専門としていない（体育学士を有していない）。

また、各学校には専任スポーツ指導者を配置する制度があり、これは台湾の学校体育の特色の一つとなっている。この制度は、ライセンスや研修に関しては各スポーツ協会の管轄、制度の規則や審査に関しては政府の管轄、実際の採用に関しては各学校の管轄といったように、各機関がそれぞれの役割を担って進めている。この専任スポーツ指導者の任用ルートは二つあり、一つは、各学校が独自に行う方法で、学校職員としての身分となる。もう一つは、教育部または各自治体が行う方法で、外部指導員としての身分となる。

実際に採用された専任スポーツ指導者の内、体育関連学部を卒業（体育学士を取得）している割合は、小学校で約55.4%、中学校で約92.8%、高等学校・専門学校で約94.6%、大学で約97%となっている。

カリキュラムに関しては、1週間当たりの体育授業の平均実施時間は小学校が約74分、中学校が約91.8分、高等

学校が約 104 分である。

4.1.3 2018 年台湾における体育・保健体育の動向

台湾において、2006 年に示された 9 年間の義務教育用のカリキュラムは、スキルを中心に育成が目指されていたが、新たに改訂される 12 年基本教育カリキュラムでは、リテラシーに焦点化して作成が進められてきた。理念として、1. 生徒個々の能力に対応したカリキュラム、2. 生徒を学習者の主体とする（学習意欲の向上）、3. 多面的で柔軟なカリキュラムという方針が示されている。

政府は、2013 年 9 月に「体育スポーツ政策白書」を公布し、Sport & Health 150 プログラム（以下、SH150）として、学校における週 150 分の運動機会の義務化や小学校体育専科の導入、高校体育の各学期への義務付けなどを打ち出し、体育授業の充実を図っている。

2018 年報告では、これらの台湾の政策的変化が学校現場でどのように受け止められ、実践が図られているかについて、現地調査と照らし合わせて明らかにしようとした。

筆者らが研究実践している日本における広域連携教師ネットワークに加盟する大学、教育委員会、教師、大学院生等 15 名によって、現地小学校及び中学校を訪問し、12 年間教育課程の開始準備による授業の変化、子供の運動課題について、中期目標（2016-2019）の達成状況と実態、授業分析による日本と台湾の授業構造の相違、学習評価、ICT 活用の状況等に着目し調査を行った。

その結果、台湾における体育科教育の変化として、12 年間教育課程による、スキルからリテラシーへの教育目標の変化に基づき、自発性、コミュニケーション能力、体験学習の導入など、訪問校においては、特徴的なカリキュラムの取組が認められた。

また、「体育スポーツ政策白書」（2013）における SH150 や体育専科教員の小学校への導入は、訪問した小学校 2 校において、体育の授業充実に反映されていることが明らかとなった。一方、学校の特色を出す中で、1 校 1 種目を中心としたカリキュラムがみられることや、日本の 444（小学校 1 年～4 年、小学校 5 年～中学校 2 年、中学校 3 年～高校 3 年）のシステムによる、多様な運動経験から選択への移行といった指導内容の構造化とは異なる方向性がみられること、政府が中期計画で掲げた特別支援や障害者体育の推進については、訪問校では具体的取組が確認できなかったことから、これらの成果及び具体的な授業の実践について継続的に調査を続けていく必要があるとした。

4.1.4 2023 年 Ching-Wei Chan 氏の報告

2023 年 3 月に開催された九州体育・保健体育ネットワーク研究会における Ching-Wei Chan 氏の報告による台湾のナショナルスタンダードの変化は次の特徴を提示している（図 1）。

なお、Ching-Wei Chan 氏は、台湾師範大学助理教授であり、国際高等教育体育学会（AIESEP）理事、台湾教育

省高級中等学校体育学科中心諮詢委員を務めており、台湾学習指導要領の改訂に深くかかわっている。

1970 年代より National PE Standard が導入されている。体育のみで保健が含まれていなかったが、小学校では 2001 年、中学校では 2004 年から保健体育となった。また、小・中・高ともに 2019 年から 12 年間の保健体育カリキュラムが施行されている。

また、内容においても、2004 年までは技能ベースで、体操、陸上、球技、ダンス、武術、水泳やフィットネス等の活動内容が入っている。それ以降から 2019 年は、運動領域は減少して種目名で示されなくなった。つまりコンピテンシーベースで、例えばフィットネスや防衛性ある活動、レジャー活動、挑戦性のある活動、競争性のある活動、表現性のある活動といった示され方に変更されている。

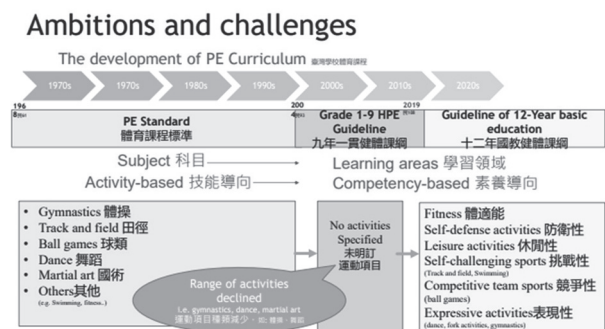


図 1 台湾ナショナルスタンダード 体育・保健体育の変遷 (Ching-Wei CHANG, 2023)

12 年間の保健体育カリキュラム (2019) 改訂に向けては、筆者は、台湾運動教育学会において、2013 年、2016 年、2020 年の 3 回にわたり、日本の学習指導要領の理念、目的、内容等を中心とした招待講演を通して情報提供を行ってきた (Sato, 2022)。

特に、日本における教育課程全体の改革の動向や、体育については、小中高の 12 年間を見通した 4 年ごとに教育課程を捉える校種の接続を重視したシーケンスの考え方、認知的領域、情意的領域、運動精神的領域といったブルーム教育分類学を基盤とした指導内容の整理等について学術的視点から情報提供を行ってきた。このように、台湾では、日本をはじめ、米、英、韓国等先進各国の体育のナショナルスタンダードの改訂動向の情報収集を行い、自国に適した思想やシステムを取り入れてきたことが伺える。

4.1.5 台湾における指導の流行の変遷

政府や地方による教員の専門的力量を高めるプログラムやコースの流れの変容について、1980 年代は、小学校を中心に、「循環指導」と呼ばれる運動技能の習得や体力向上を目的として、各学年で設定された目標に沿って、基本動作や器械体操、球技などを段階的に指導して指導法が中心であったが、1990 年代は、生涯学習論の世界的広がりを受け、運動技能の向上だけでなく、心身共に健康で豊

かな人間性を育むことを目的とする「楽しい体育」が支持されている。

その後1994年以降、一人ひとりの違いに配慮した「アダプテッド体育」の考え方や、1999年以降、運動や健康の基盤となる身体能力の向上に着目した「フィットネス」の内容、2003-2008年以降には、TGFU (Teaching Games for Understanding: 理解を深めるためにゲーム形式で学ばせる方法) の構成理論 (Kirk and MacPhail, 2002) の影響が、見られたとしている。

教育においては、「構成主義」への着目がなされてきた時代でもあり、それまでの個人技能中心の学習から、ゲームを中心として、特に球技などのオープンスキルの戦術において、状況判断や仲間との意思疎通などの本質的課題に着目した学習手法であり、戦術のメカニズムや他者との信頼関係、意思決定など情意的側面にも学習内容が広がることから、イギリスから世界各国への広がり進化を遂げていくことにもなる。

さらに、2014年以降、OECD DeSeCo (Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations) のキーコンピテンシー論議は、周知のとおりであるが、2019年改訂では、台湾の保健体育カリキュラムは、図2で示すとおり、コンピテンシーベース (Condello et al., 2021) として、「Holistic Development」のキーワードで示される、1) 身体発達、2) 認知発達、3) 言語発達、4) 社会的感情発達を背景として、コア・コンピテンシーとして示される3つの大項目 (1. 自発性 2. 社会参画 3. コミュニケーション・関係性) 及びさらに9つの目標をキーコンピテンシーとして整理し、図1で示したフィットネス、防衛性ある活動、レジャー活動、挑戦性のある活動、競争性のある活動、表現性のある活動の中から育成しやすいコンピテンシーを重点的に取り上げ、そこから獲得できるフィジカルリテラシーを育成しようとする教育課程の枠組みとなっている。

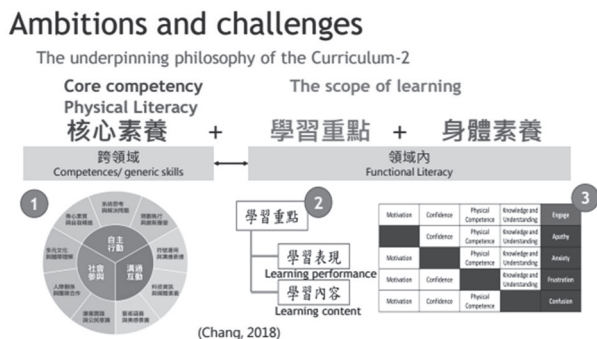


図2 2019年改訂による体育の指導内容 (Ching-Wei CHANG, 2023)

4.1.6 台湾の保健体育科ナショナルスタンダードの変遷まとめ

台湾の保健体育科ナショナルスタンダードの変遷は、これまで述べてきたように、世界最低の出生率 (2008) や移民問題の背景の中、1. 生徒個々の能力に対応したカリキュラム、2. 生徒を学習者の主体とする (学習意欲の向上)、3. 多元的で柔軟なカリキュラムという方針で変更が図られてきた。2018年の視察では、「体育スポーツ政策白書」(2013) におけるSH150や体育専科教員の小学校への導入の状況を確認したが、12年間教育課程によるスキルからリテラシーの教育目標の変化に基づき、自発性、コミュニケーション能力、体験学習理論の導入など、訪問校においては、特徴的なカリキュラムの取り組みが認められた。

本格的な変更に入った2019年改訂では、コンピテンシーベースでの内容変更となっており、運動種目を中心とした学習領域から、フィットネス、防衛性ある活動、レジャー活動、挑戦性のある活動、競争性のある活動、表現性のある活動の中から、各学校が種目を選択し、「核心素養」と称される体育の中核的内容の育成が進められている。

4.2 台北、新北、台中地区の実態調査

本調査では、2019年より小中高のすべての段階で実行されているコンピテンシーベースでの内容変更の実効性の現状とその課題を明らかにするため、学校訪問を通して、授業分析、管理職及び担当教員へのインタビュー調査を行った。

4.2.1 訪問者

本調査には、大学関係者7名、小学校教諭1名の合計8名が参加し、小学校2校及び中学校1校、高等学校2校の訪問及び記録を行った。

表1 日程及び訪問校

月日	時	場所	住所
2023年	午前	臺中市北屯區美里國民小學	臺中市北屯區崇德路二段568號
3月6日(月)	昼(昼食)	國立臺灣體育運動大學	臺中市北區雙十路一段16號
	午後	臺中市立東山高級中學	臺中市北屯區興六路200號
3月7日(火)	午前	新竹縣竹北市光明國民小學	新竹縣竹北市光明九路65號
	午後	新竹縣竹北市成功國民中學	新竹縣竹北市成功八路99號
3月8日(水)	午前	新北市新莊區昌平國民小學	新北市新莊區昌平200號
	午後	臺北市立明倫高級中學	臺北市大同區承德路三段336號
3月9日(木)	午前	國立臺灣師範大學	台北市和平東路一段162號

*国立清華大学運動科学系、臺灣健康科技管理協會会長 鄭麗雄教授及び新竹市教育委員會推當委員との意見交換会を実施している。

4.2.2 調査の概要と研究方法

本研究においては、調査の継続性及び共通性を担保するため、2018年作成の記録シートを用いて調査項目を統一し、訪問校の管理職、授業実践者、関係大学アドバイザーへのグループインタビューを実施した。聞き取りについては、訪問した6校について、2018年までの概要について事前に訪問者で確認し、次の項目について調査を実施した。

1) 基本情報 (学校名、学校規模、訪問日時、対応者、学校概要)

2) 授業概要 (対象学年, 人数, 授業者, 授業概要, 授業期間記録)

3) 質疑応答 (授業のねらい, 体力向上, SH150 の取り組み, 授業者自評) 及び観察者所感

特に, ナショナルスタンダードの帰着点である授業観察を重視し, 期間記録, 具体的な活動や教材, 時間ごとの観察者の気づきをまとめ, 不足分については, 帰国後, 3月末までに, 許諾を得て記録した授業映像を担当者ごとに見直し, 複数の視点でチェックをした記録シートを作成した。

記録については, それぞれの経験校種や経歴に基づいた多様な視点からの分析ができるよう配慮し, 本研究2名が主副を分担し, 半構造化インタビューを用いて, 調査を実施した。なお, 日本学術振興会の示す研究倫理に基づき, 撮影, 録音の事前許可を得たうえで, 各学校では, 再度確認の上, 児童生徒が特定されないよう記録された期間記録, 質疑応答の録画, 音声をもとに本記録を作成した。

担当した学校は次のとおりである。

事例1 (臺中市北屯區仁美國民小學) は, A (小学校教員16年, 指導主事14年, 体育科教育を専門とする大学教員で, 現在, 博士課程後期に所属する) と B (中学校教員18年, 体育専科教員10年を有するベテラン教師) が担当した。

事例2 (臺中市立東山高級中學) は, C (中学校教員33年, 体育科教育, 保健科教育を担当する大学教員6年) と D (小学校教員9年, 中学校教員10年, 体育科教育を担当する大学教員) が担当した。

事例3 (新竹縣竹北市光明國民小學) は, B が主担当, A が副担当を務めた。

事例4 (新竹縣竹北市成功國民中學) は, E (ダンス及びスポーツ健康科学を専門とする大学教員16年) と, C が担当した。

事例5 (新北市新莊區昌平國民小學) は, D 及び F (中学校教員10年, 体育科教育及びICT活用を専門とする大学教員9年, 博士課程修了) が担当した。

事例6 (臺北市立明倫高級中學) は, F が主担当, E が副担当を務めた。

なお, 授業観察シートについては, 体育科教育の組織的観察法で用いられる期間記録法に基づく量的分析 (高橋, 1994) 及び事後インタビューによる Q&A 及び観察者所感から得られた記述中の語句の関係を検討するためにユーザーローカル社のテキストマイニングを用いた共起ネットワーク分析を行い, 考察を検討することとした。テキストマイニングは, テキスト型の質的データから自動的にデータを抽出 (形態素解析) した後, 様々な多変量解析を行うことで, 類似性および関連性の抽出や規則性の探査などができ, 客観的な概念構築や組織化を図ることが可能となる (西村・清水, 2021)。これを用いて本研究は, 質的研究および量的研究の両面の研究手法を併用した混合研究とし

た。

これらの分析を通して, コンピテンシーベースでの内容変更の実効性の現状とその課題を明らかにすることとした。

4.2.3 調査結果

事例1 仁美國民小學

1) 基本情報

・視察先: 臺中市北屯區仁美國民小學 Taichung Municipal Jen-Mei Elementary School

・記録担当: A, B

・訪問日時: 2023年3月6日 (月) 9:05 ~ 11:05

・学校側説明者: 陳進福 (Chen Chin-Fu) 校長

2) 学校概要

創立は2005年, 児童数は約2,000名, 体育専科教員は8名在籍している。教員1名あたり週20時間の持ち時間となっている。縄跳びやマラソンに力を入れるなど, 体力向上の取組にも取り組んでいる。学期の中間には体力テストを行い, 子供たちの体力の実態を把握している。社団 (放課後の活動) としてサッカー, ダンス, チアリーダーングが盛んな学校であり, これらは学校裁量で行っている。

3) 体育授業の実際

・対象: 小学校3年生28名 (男子14名, 女子14名)

・場所: 藍球場

・授業時間: 9:30 ~ 10:10 (40分間)

・授業者: 陳央榆 (Chin On-yu) 教諭 (教職歴15年 体育専科)

・授業の概要

i 単元配当時間: 全4時間 (本時2時間目)

ii 単元名: 藍球運球練習

iii 児童の本単元についての学習経験: なし (但し, 放課後や社団での経験者あり)

iv 本時のねらい: バasketボールをドリブルで運ぶ (技能)

事例2 臺中市立東山高級中學

1) 基本情報

・視察先: 臺中市立東山高級中學 Taichung Municipal Dongshan Senior High School

・記録担当: C, D

・訪問日時: 2023年3月6日 (月) 13:00 ~ 17:30

・学校側説明者: 翁文修 (Weng wen-siu) 校長, 陳羿琴 (Chen YI-Jen) 教諭

2) 学校概要

創立は1970年, 生徒数は約3,000名 (中学部65学級, 高等部30学級, 計95学級), 普通科と体育科を有する中等教育学校であり, 9種目の運動部活動については, 全国トップクラスである。翁校長は, 学校経営において, 一般生徒 (普通科) については受験を目指す体制を, 体育科の生徒については夢を目指す土台をつくるなどの環境を整

えることを大切にしている。プロへ進むものが2割程、体育大学やスポーツの盛んな各県の一般大学、専門学校に進学する者が8割である。

3) 体育授業の実際

- ・対象：中学部2年生31名（男子16名，女子15名）
- ・場所：球技コート（バレーボール兼バスケットボールコート2面）及び陸上競技場
- ・授業時間：14:05～14:55（45分間（実質50分間））
- ・授業者：陳羿蓁（Chen, YI-Jen）教諭（教職歴：8年目）
- ・授業の概要

i 単元配当時間：全6時間（本時2時間目）

ii 単元名：バレーボール

東山高級中学においては、活動場所の割当により、今週はバレーボール、翌週はバスケットボールというように活動を展開している。同時間帯には、球技コート（バスケットボール及びバレーボール2面）に隣接する陸上競技場フィールドにて、高等部の生徒がキックベースボールを行っていた。

4月半ばの校内のバレーボール大会（3回戦実施，1・2回戦は男女別，3回戦は男女混合にて試合を行う。）に向けて、また活動場所の割当に応じて、バレーボールを取り扱っている。

iii 児童の本単元についての学習経験：中等部1年次での学習経験がある。

iv 本時のねらい：本時は、ボールがネットを越えるようにコントロールすることができることを目指す。アンダーハンドサーブあるいはチャンスボール投げ入れ、アンダーハンドパスあるいはオーバーハンドパスによって返球したり、トスをアタック等で返球（3段攻撃）したりして、ネットを越えるように返球できることを目指している。

事例3 光明國民小學

1) 基本情報

- ・視察先：新竹縣竹北市光明國民小學 Taichung Municipal Jen-Mei Elementary School
- ・記録担当：B, A
- ・訪問日時：2023年3月7日（月）10:00～11:50
- ・学校側説明者：蔡孟翰校長

2) 学校概要

創立は2001年、児童数は約1,600名、教員数は100名弱である。在籍する児童の学力は、全国と比較して高い状況である。校舎の1階には、体育的な活動が行えるスペースが設けられており、花や木々に囲まれて、自然あふれる環境のもと、教育が行えるように配慮がされている。精華大学との連携のもと、新竹懸の中でも体育科教育をリードする役割をもった学校である。

3) 体育授業の実際

- ・対象：小学校5年生25名（男子14名，女子11名）
- ・場所：1階活動スペース

・授業時間：10:30～11:10（40分間）

・授業者：侯彦廷（Kou gen Tei）教諭

・授業の概要

i 単元配当時間：全4時間（本時1時間目）

ii 単元名：多元学習玩定向

iii 児童の本単元についての学習経験：なし

iv 本時のねらい：國語生字玩定向（中国語の単語を使ってオリエンテーリングを行う。ねらいとする素養は協力及び問題解決）

事例4 成功國民中學

1) 基本情報

・視察先：新竹縣竹北市成功國民中學 Hsinchu County Cheng-Gong Junior High School

・記録担当：C, E

・訪問日時：2023年3月7日（月）14:10～14:55

・学校側説明者：陳雯玲（Wen Ling Chen）校長，吳舒婷（Wú Shu Ting）教諭

2) 学校概要

創立は1997年、生徒数は約1,800名（55通常クラス，3体育クラス，3アートクラス，4特殊教育，計61学級）である。

3) 体育授業の実際

・対象：中学1年生31名（男子19名，女子12名）

・場所：屋内運動場

・授業時間：14:10～14:55（45分間）

・授業者：吳舒婷（Wú Shu Ting）教諭 教職1年目

・授業の概要

i 単元配当時間：全4時間（本時2時間目）

ii 単元名：フィットネス

iii 児童の本単元についての学習経験：なし

iv 本時のねらい：20秒で勝負が決まる鬼ごっこの世界選手権をモチーフにし、追う方と逃げる方の2グループに分かれてポイントを競っていた。パルクールの要素を取り入れて、エリア内には机や椅子、マットなど障害物が置かれており、障害物を避けながら競い合い、負けたチームはジャンピングジャックを行う。チーム内で、対戦相手を見て順番を決めたり、どうすれば効率よく逃げられたりする（捕まえられる）かについて話し合う。

事例5 光明國民小學

1) 基本情報

・視察先：新北市新莊區昌平國民小學 Chang Ping Elementary School Xinzhuang District, New Taipei City

・記録担当：D, F

・訪問日時：2023年3月8日（水）11:00～12:30

・学校側説明者：陳月滿（Chen Yuen-Mau）校長，夏淑琴（Hsia, Shu-Chin）教諭

2) 学校概要

創立は1999年、生徒数は約2,100名（1クラス26～29

名、1学年13クラス、1～6年で79クラス）である。体育担当は、体育専門教員11名。うち2名は、1年契約のスペアティーチャーである。

創立24年目の比較的新しい学校である。新たな開発が進む地域であり、保護者、子どもの学習意欲は高い。開発中の地域であり、建築中のマンションが多く、学校の後ろには、スポーツセンターを建築中である。5階建ての校舎のつくりは、城をモチーフにしている。教員については、学校全体として意識が高く、授業前に教員同士がよくやりとりをしている姿が見られるとのことである。多様な放課後クラスを設けており、卓球、バレーボール、サッカー、ゴルフ、テニス、武道（テコンドー）、中国コマ、コーラスなどがある。

3) 体育授業の実際

- ・対象：小学2年生23名（男子9名、女子14名）
- ・場所：床にEVAマットを敷き詰め、平均台2台を設置している教室
- ・授業時間：11:30～12:10（40分間）
- ・授業者：夏淑琴（Hsia, Shu-Chin）教諭（教職34年目、新北市政府教育局国民教育輔導團、國小健康與體育領域專任輔導員）

・授業の概要

- i 単元配当時間：全4時間（本時3時間目）
- ii 単元名：体操 バランス
- iii 児童の本単元についての学習経験：視察の前週からバランスに取り組んできた。台湾では体操が少ない。臺灣師範大学チンウェイ教授配付の（7つの）教材を取り入れて実践している。単元の1時間目は、子どもたちが決めた中庭で行った。

iv 本時のねらい：本時は台湾政府が促進している内容「素養導向教學」に即した内容である。グループで話し合いをしながら通り道を創作し、渡ったり立ち止まってバランスをとったりする学習を通して、主体的に学ぶ姿勢やバランス感覚等を高めることをねらいとしている。

事例6 臺北市立明倫高級中学校

1) 基本情報

- ・視察先：臺北市立明倫高級中学校 Taipei Municipal Minglun High School
- ・記録担当：F, E
- ・訪問日時：2023年3月8日（水）14:30～16:30
- ・学校側説明者：洪金英（Hong Jin-young）校長、劉曜銘（Liu Yao-ming）教諭

2) 学校概要

創立は1968年で、当初は中学校として開校された後、1993年に当時の高校設置数が少なかったことから同高校へと変わった。生徒数は1,500名（45学級＝15学級／1学年×3学年）であり、教職員数は155名（うち体育教員は5名）である。同校の特徴は、美術科が設置されている

ことと、普通科が文系コースと理系コースに別れていることである。また、2015年から2016年にかけて環境に配慮した校舎に改築された。隣接する高速道路の高架下にある敷地は、同校の活動可能なスペースとなっている。

3) 体育授業の実際

- ・対象：高校1年生33名（男子8名、女子25名）
- ・場所：体育館
- ・授業時間：15:10～16:00（50分間）
- ・授業者：劉曜銘（Liu Yao-ming）教諭（教職歴5年目、採用後に修士号取得、体育主任）

・授業の概要

- i 単元配当時間：全4時間（本時4時間目）
- ii 単元名：健康身体適能（フィットネス）
- iii 児童の本単元についての学習経験：なし
- iv 本時のねらい：単元のまとめ、サーキットトレーニングの設計、運動実践、授業外でも実践できるようになること

4. 2. 4 訪問校の視察まとめ

授業視察の学校比較の特徴を表2、期間記録による量的分析結果を表3で示した。

1) 12年間教育課程の変化

台中地区事例1、事例2では、変化へのコメントはみられなかった。新竹地区事例3、事例4では、核心素養の育成を意識した大幅な授業の変化へのコメントが見られ、新北、台北事例5、事例6では、学習のプロセスや、学びを生み出す学習手法の変化へのコメントが確認された。

2) 子どもの運動課題

肥満、視力低下が課題との意見が見られる。地区に応じて、学力格差や運動嫌い等の課題も散見された。

3) SH150の工夫

体力重視から、資質能力への重点が見られることから、各地区とも新たな取り組みではなく、これまで構築してきた学校行事や地域との交流などを継続している。一方で一部の取り組みが形骸化しているとの意見も見られた。

4) 領域、運動種目、ねらい

台中地区事例1、事例2では、これまでの運動種目の技能を中心としたねらいを示しており、初めの段階での運動嫌いへの対策、技能の高い生徒が支援するなどが見られた。

新竹地区事例3、事例4では、多元学習玩定向、フィットネス（バルクール）など、従来の運動種目を教材とした前提を取らず、「台湾体育教學類型」を基にして、コンピテンシーの育成を直接目指しており、ねらいも、協力及び問題解決などの特徴的なねらいとしている。

新北、台北地区事例5、事例6では、「素養導向教學」（図2）を例に、核心素養を方向目標としつつ、体育の指導内容である「身体素養」を軸とした授業を構築しており、事例5では、平均台につながる素養の育成、事例6では、日常化につながる運動習慣へのアプローチを目指しており、体育での指導内容を具体的なねらいとしつつ、包括的にコ

表2 訪問校調査シート結果一覧

	①臺中市北屯區仁美國民小學	②臺中市立東山高級中學	③新竹縣竹北市光明國民小學	④新竹縣竹北市成功國民中學	⑤新北市新莊區昌平國民小學	⑥台北市立明倫高級中學校
見学した領域、運動種目等、ねらい	小学校3年生、バスケットボール バスケットボールドリブルで遊ぶ(技能)	中学部2年生、バレーボール ボールがネットを越えるようにコントロールする こと(技能)	多元学習志向 ねらい 協力及問題解決 ①(台湾体育教學類型)を活用し、核心素養へ の寄与をねらいとする	中学1年生 フィットネス 集まった世界選手権とバスケを取り入れ た教材 課題解決をねらいとする	小学2年生「体操 パランス」 「素養導向型等」に照準した主体別に学ぶ姿勢や パランス感覚等を高めるねらい	高校1年生 健康身体運動(フィットネス) 運動 計画を立てる授業
授業スタイル(モストン)や特徴	教師主導型(スタイル)の技能を丁寧に指導、規 程の確立があるが、インストラクションが多 かつアタスの時間がやや多い課題も見られる。	教材の工夫や運動の性質を特徴とする授業 スタイル(CT)、美し、受容的雰囲気、相互作用 を大切にしている。球技大会がゴールイメージ	競争によって、漢字カードをマスにはめるピン ゴラム(該当なし) 単純な活動が続く、運動量が少ないといった課 題	実践一括含いゲーム修正 主体的学習スタイル(スタイル1)を指す課 題実践	教師34年指導経験、スタイルのあるいはよ るスキルステップを取り入れつつ、創造性、 課題解決などを複合的に取り入れている。	ICTを活用したオリジナル教材 運動の原理を発生し運動課題に対応する(ス タイルC自己チェック) 教師グループの意欲の高さ
1) 12年間教育課程による授業の 変化	— 特に変化なし	— 特に変化なし	資質・能力ベースでの総合的授業実践、運動 課題以外の課題解決に重点 教師は、授業記録表を活用し、共通の視点で 授業観察し、気づきをコメントしついでにシ ステム化	資質・能力ベースでの総合的授業実践、運動 課題以外の課題解決に重点	課題を先行する、授業するといった 学びのプロセスを重視、意思決定の児童への 権利重視	O学びの共同体(指導者の支援 体育の先生たちでグループを作り、セミナーや 勉強会への出席(佐藤博之の台湾でのセミナー、 林つづみ(アークジョブ英語経験あり))
2) 子供の運動課題について	— 児童の運動課題(視力低下と聴覚・視力低下 は、スマホの使用とゲームの影響ではないかと 感じている。 ・走力や筋力課題	・男女や個人の技術差	運動習慣の減少 一方、学力調査の結果は高い状況	・運動使用の生徒数増加 ・運動量の増加	柔軟性、巧緻性に課題	運動の日常化に課題、卒業後の生涯スポーツ を目指す授業の充実
4) 1週間に150分以上の運動時間を 確保する (SH150) の学校の 実施状況	学校全体で行うマラソンや縄跳びなど(放 課後の活動)としてサッカー、ダンス、テニ スなどで行っている。他、これらは学校職 員で行っている。他、これらは、授業を 落すための取組を学校で行っているが、今は 保護者に対応を願っている。	ヒアリング時間が十分でなく、聞き取りなし	以前は、放課後の活動に参加する児童も多く いたが、現在は減り、運動量不足の児童が 増えている。学校ではなるべく(体を動かす ことができるよう、活動時間や内容を工夫でき るよう)に力を入れている。	他教科との連携も図り、実践しようとして いる。他教科との連携で運動中の身体の仕 みや食事について、また運動科学のよう な問題と実践を合わせて学習している。	特別な取組は行っていないが、考えさせ ること、学習の場等を選択させること、学習内容を 決めさせること、つつもの量を組み合わせること 等を大切にしている。	ヒアリング時間が十分でなく、聞き取りなし
6) ICT活用	・学校におけるWi-Fiの設備整備は整ってき ていない。 ・体育については、ICTの活用よりも、動きに 主眼を置いた指導 ・知識の定着や思考力、判断力、表現力等を 育成する取組への活用等は行っていない。	・タブレット等を活用は進められていない。 ・今年、体育科に含めたタブレットが普及、マ ラソンなどの運動分析をグループで行わせるこ とはあっても、体育の授業では顕著に利用して いる授業は行われていない。	・体育授業では使っていない。 ・ワークシートなどを作成し、活用しているが、 児童がタブレットを体育授業中に活用する活 きが行われていない。 ・(卒業後のプレゼンテーションなどに教員が、 巧みに活用している状況は見られた)	・学校に複数台あるが、まだ授業では使用 していない。 ・今年、副科のダンスやダンスの授業 等に利用したいと思っている。 ・近隣の学校でもまだ実践例が少なく、運動中 に活用することも考えると検討の段階である (授業中)	・子供が制作した通りを等身で撮っていたの ため、記録に誤りがあるため、そのためICTを活用 することある。	・今回の授業ではネット接続が必要であった ため、接続できる1台を使わせた。また、1人1 台にすることで、学習と無関係の操作(ゲーム など)をしてしまわれた。

コンピテンシーの育成を目指している。

5) ICT活用

インフラ整備がまだ地区により不十分であること、機材の管理や使用リテラシーへの危惧から、意外であるが活用はあまりされていない。

4.3 考察

4.3.1 共通調査項目の分析(授業スタイルや特徴)

台湾における体育科教育研究では、モストンの指導スペクトラム論^{註1)}が一般的に支持されていることから、Moston and Ashworth (2010) 及び鈴木 (1996) によるモストンの示す指導のタイプ11分類を参考に、事例ごとの授業スタイルを分析した。

台中地区事例1、事例2では、技能をねらいとする地区では、教師主体(Type A)あるいは練習、ペア学習スタイル(Type B, C)に分類できるが、タイプA~Eまでを、既知の内容を再生産するスタイルとしており、核心素養の一つである「主体性の育成」は限定的であるアプローチと分析できる。また、新竹地区事例3、事例4では、クローズドエンド型課題解決学習(convergent discovery style, Type G)と、オープンエンド型課題解決学習(divergent production style, Type H)に分類できるが、生産スタイルに分類され、核心素養へのアプローチに適しているモデルであると推察される。

新北、台北地区事例5では、自己チェックスタイル(self-check style, Type D)、誘導発見スタイル(guided discovery style, Type F)の組み合わせ、事例6では、自己チェックスタイル(self-check style, Type D)、学習内容設計スタイル(individual program, Type I)が採用されており、創造性や生産スタイルに分類されるが、核心素養と体育の指導内容をバランスよく取り上げるアプローチであり、体育の内在的価値を維持しつつ、モストンが目標

とした「運動技能、社会性、情緒、認知、モラルという5つの側面を発達させることを目標とした(鈴木, 1996)」を具体化したアプローチと分析できる。

4.3.2 期間記録からの分析

台中地区の小中学校では、技能を授業のねらいとしており、モストンの分類で見ると、事例1は教師主導型、事例2はペア学習スタイルに類似している。旧来型の授業のねらいであることから、ともに運動学習の時間は、全体の7割程度であるが、事例1では待機時間が長いなど、学習非従事時間も見受けられた。新竹地区の事例3と事例4は、新たなコンピテンシーベースの台湾体育教學類型を基にしたねらいを設定しており、運動の領域という概念の分類は適さない斬新的な授業づくりとなっている。技能以上に、課題解決力や課題への修正提案など核心素養に直結した授業を目指しており、具体的には、事例3は、国語と体育、算数と体育などクロスカリキュラム的な色彩が強く、事例4はパルクールと鬼ごっこを教材とした斬新な指導内容となっている。

コンピテンシーベースでのねらいに迫ることで、理念には近づくものと思われるが、事後インタビューによるQ&Aにおいて、授業者も「体育としての特性を大切にしたい」といった発言が見られたが、「運動でこそ育てたい素養とは何か」という問いと課題に直面した。量的分析で見ると、事例3はインストラクション(30%)が多く、運動時間(50%)ではあるが、個別にみると順番待ちも多く、課題の単調さは、運動そのものの楽しさがやや感じにくいという課題も見られた。事例4についても、1時間では授業全体の判断は困難であるが、運動学習(15%)と学習非従事率(10%)の高さは、資質能力へのアプローチへの挑戦時の教材の熟成度の低さが要因となっており、コンピテンシーベースでの授業づくりの難しさが伺えた。

事例5と事例6は臺灣師範大学が指導する2校であるが、

表3 期間記録による分析結果

	マネジメント (M) 出席, 用具準備 インストラク ション	(I) 先生 の師範場 面, 全体, 個別	認知学習 (A1) 知 識を教え る場面, 教えあい	運動学習 (A2) 準備 運動, 動き づくり, 練 習, ゲーム	学習非従 事 (0)	合計時間 (分)
①臺中市北屯區仁美國民小學	6%	22%	0%	67%	6%	36
②臺中市立東山高級中學	4%	23%	4%	70%	0%	53
③新竹縣竹北市光明國民小學	5%	30%	15%	50%	0%	40
④新竹縣竹北市成功國民中學	10%	13%	52%	15%	10%	52
⑤新北市新莊區昌平國民小學	9%	13%	35%	43%	0%	46
⑥台北市立明倫高級中學校	10%	31%	20%	39%	0%	49

*小学校 40 分, 中学校 45 分, 高等学校 50 分設定だが, 合計時間が多いほど, 複合的に時間が使われていることを示す。

事例5は平均台運動につなげるバランスやモストンの言う「スタイルDあるいはE」によるスモールステップを取り入れつつ, 創造性, 課題解決などを複合的に取り入れている授業であり, 体育の指導教員としての資格を有する教師の授業力の高さが特徴として, 技能, 思考力, 自発性などのバランスの取れた模範的授業となっている。認知学習(35%), 運動学習(43%), インストラクション(13%)などの量的に見ても, 端的にポイントを示しつつ, 思考の時間や相互作用の時間が重層的に仕組まれた授業が展開されていた。事例6は, 運動の計画を立てる内容であるが, 教師グループのICTを活用した自主教材の導入や運動の日常化を目指した授業であり, 体育は何を教える教科なのかという信念のある授業であり, 領域の特性上一見運動時間(39%)の少なさやインストラクション(31%)と多めに見えるが, 知識に従事する高等学校に適した配分とも言える(鈴木理, 1994)。

4.3.3 観察者分析にみるテキストマイニング(共起ネットワーク)による分析

事後インタビューによるQ&A及び観察者所感で得られた各観察者によるインタビュー記録は, 地区ごとに3つに集約し, テキストマイニング(共起ネットワーク)での分析を行った。

1) 台中地区事例1と事例2のキーワード

図3では, グループごとに, A「わかるとできる」, B「健康課題と地域連携」, C「ICT活用方策」と命名した。技能を軸としたキーワードの関連の高いグループが確認されたことから, 観察者からも, 従来型教師主導の細かな技能指導の効果とともに, インストラクション効率を上げる「ICT活用方策」などの改善の指摘が見られた。

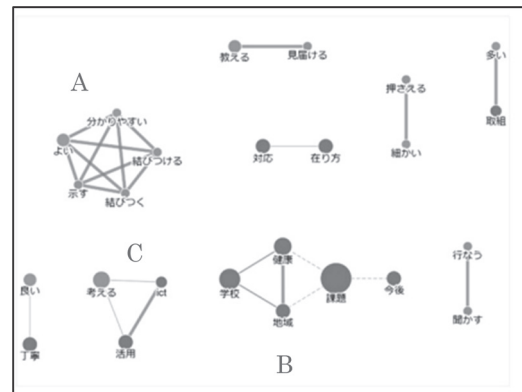


図3 技能重視型

2) 新竹地区事例3と事例4のキーワード

「チームでの意思決定」などの成果はみられるが, A「算数, 国語」, B「走る, 分ける」など, グループの意味生成が難しいキーワードから, 観察者の分析からは, 資質能力ベースの成果を捉える難しさが表れている。一方, 「安全への配慮」, 「資質・能力ベースの体育授業の在り方」などの課題が見られた。

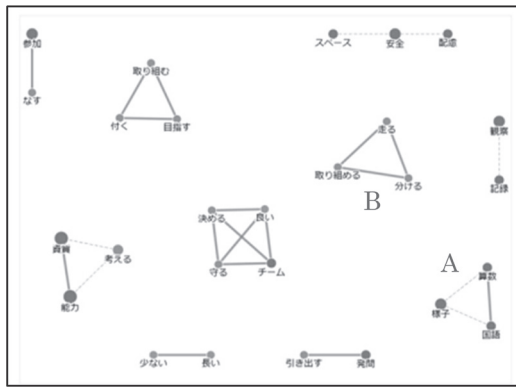


図4 核心素養ベース型

3) 新竹, 台北地区事例5と事例6のキーワード

それぞれのグループをA「学習スタイル」, B「相互作用」, C「体育の意義」, D「児童の意欲」, E「リフレクション」と命名した。本授業の観察からは、様々な成果がグループ化されている。「現代に求められる教育のあり方を体現しようとする姿勢」などの肯定的なコメントが見られた。

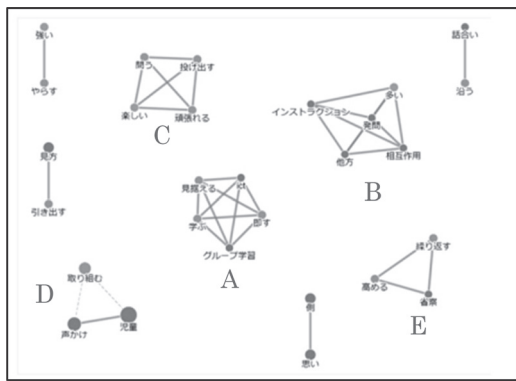


図5 核心素養+体育内容型

①核心素養+体育内容では5つのカテゴリー、②技能重視型では3つのカテゴリー③核心素養では分類が困難であったことから、①～③の順に観察者の意味生成が生じやすく、①核心素養+体育内容の授業提供が、観察者からみて指導内容が明確となっている。

5. 結論

本研究の目的は、これまで訪問調査を継続してきた台湾における体育科教育の経年的変化と現状から、日本の体育科教育について示唆を得ることである。

そのため、1) 台湾における体育科教育の変遷、2) 経年調査項目から見た学校現場の実践、3) 訪問視察における日本の多様な教育実践者からみた分析という3つの視点から現状を概観し、日本の学習指導要領の実施とその課題について、以下の示唆を得た。

1) 台湾における12年間教育課程は、先行研究(図2)で示す通り、各教科が共通して目指す核心素養と体育独自の指導内容(指導の重点化+身体素養の育成)の組み合わせで、コンピテンシーを育てる構造としており、取り上げる領域は、各学校の学校教育目標や指導のリソース、施設等の状況によって柔軟に教材を選択しつつ進められている。

2) 子供の運動課題には、肥満、視力低下、運動嫌いの増加などの課題が見られるが、ナショナルスタンダードは、資質・能力の育成を明確に示しており、体力低下に着目したSH150の取り組みは、現状維持、形骸化の傾向も見られる。また、ICT活用は、環境整備が2018年よりさほど進められていないが、台北地区から整備と活用が始まっている。

3) 聞き取りシート、授業観察記録、記録者分析から、次の点が明らかとなった。学校視察によって、地区ごとに、①教師主体を中心とした技能重視の取り組み、②核心素養に着目した取り組み、③核心素養を方向的目標として捉えつつ、体育の指導内容(重点指導事項+身体素養)を中核とした取り組みに概ね分類された。なお、授業観察による期間記録の分析による指導時間の配分と、観察者キーワードの分析にみる観察者からの評価は、①核心素養+体育内容、②技能重視型、③核心素養の順に高く、体育としての資質・能力の育成に向けての授業の方向性が確認された。

上記の結果から、台湾の視察校で見られた①核心素養+体育内容のように、資質・能力の育成を方向性に見据えつつも、具体的な体育の教科内容へのアプローチを行うことで、日本における2017.2018年改訂学習指導要領で示される「学力の3つの柱」の育成に向けて、「資質・能力」を方向的な目標とし、体育の指導内容で示された「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の内容をバランスよく育む指導を充実することで、「教科としての本質」を見失わないようにすることが授業改善の方向性として意識すべきとの共通認識が確認された。

なお、教師主導、生徒主体の指導を二項対立で捉えるのではなく、ICT活用を含めた様々な指導スタイルを効果的に組み合わせ、生徒主体とした指導の在り方が求められていることは日本も同様であり、先進的な取り組みの動向を今後も把握していく必要がある。^{注2)}

注1) モストンは、アメリカ教育改革の流れの中で、教師主導と生徒主体の学習アプローチを二項対立的に捉えるのではなく、分類した11アプローチの効果と限界を捉えたうえで、学習場面の目的に応じた最適の指導方式を選択するための整理をしたものであり、Teaching Physical Educationの1966年初版から、改訂を繰り返し2008年版に継承されてきている。

注2) 各校の視察から得られた特徴的な取組は、本稿では、学校の優劣を述べるものではなく、先進的な取り組み

参考資料 期間記録記入例（新北市新莊區昌平國民小學）

	M	I	A1	A2	0	ねらい・具体的活動	観察者コメント
0	レ	レ		レ		<p>○ 挨拶</p> <p>1 復習</p> <ul style="list-style-type: none"> 学籍番号順の2(3)人組で、EVA製のプレート上や床面のEVAマットのつなぎ目を通り道と見立て、その上を歩く、角で3秒止まるといふ動きを先週(前時)の復習として行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 10秒で挨拶、始業時の確認等を終え、児童とやりとりしながら、スムーズに前時の復習としての運動に取り組ませていた。 前時の学習内容を想起させながら、バランスをとって歩くこと、静的バランスをとることを促していた。
3				レ		<ul style="list-style-type: none"> 前の人のバランスとりの真似をする。 	
4	レ					<p>2 主要活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 1m強の硬質スポンジ製の長い棒状のもの2本、筒状のもの1本を受け取り、どのような通り道をつくるか話し合いをする。 配付された3本でどのような道をつくるか話し合い、つくれたら実際に歩く。 これからの活動の説明を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 態度の良い2(3)人組のどこから用具を配付する旨を伝えた上で手際よく用具を配付していた。グループ間の安全な間隔をとれているかの確認も促していた。 バランスをとって歩くことを促していた。 児童相互の関わり合いを大切にさせるための声かけ、用具の扱い方、安全に関する声かけなどしていた。
7			レ	レ		<ul style="list-style-type: none"> 4(3)人組で、通り道の創作、話し合いをする。創作した通り道を実際に歩く。 	<ul style="list-style-type: none"> 「あと1分、まだ歩いてないと時間なくなるよ。」と声をかけ、活動を促進していた。 創作、話し合いにうまく入れない児童と同グループの他メンバーに声をかけ、活動を促進していた。
9			レ	レ		<ul style="list-style-type: none"> 先頭で最初に歩く人がリーダーとなり、通り道を歩く。 グループごとに創作、話し合いをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 演技前後の挨拶、演者への拍手等を求めたり、促したりしていた。
12				レ			
15						<ul style="list-style-type: none"> ペアグループで、創作した通り道のテーマと実際に歩く姿を相互に発表・観察する。 3グループが発表、3グループが観察する。 発表グループのテーマを確認する。 	
16			レ	レ			
17						<ul style="list-style-type: none"> ペアグループの互いの場を楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 前半の発表グループのテーマは「マッチ、まんじゅう、ケータイ」であった。後半の発表グループのテーマは「虹迷路、色鉛筆、私の新しいお家」であった。 態度のよいグループから先に活動できることを伝え、準備を整えさせる。 児童が夢中になって、通り道を通ったり、静的バランスをとったりして活動を楽しむ姿が見られた。
18				レ			
19							
20			レ				
22				レ			
24			レ	レ			
25							
28							
30			レ			<p>3 まとめ</p> <p>自グループと他グループの創作したものをやってみた感想を交流する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 児童から発表がなされる。「自分のは(線)対称、他のグループは対称ではない」「歩きやすさが違う、自分たちのが歩きやすい」「相手のは簡単、自分たちののは難しい」
35		レ		レ		<p>4 次時の予告、試行</p> <p>来週(次時)する平均台運動を少しやってみる。</p> <p>一人1回ずつ、教師の補助を受けながら、平均台に乗り、歩き、飛び降りる動きをする。見る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 児童は、平行に配置してある2台の平均台に一人ずつペアとなる形で、歩調を合わせたり、手を取り合ったりして平均台上を歩き、飛び降りていた。 安全への配慮から「もう少しやさしく降りようね」と声をかけていた。 児童は、着座時は安座していた。 来週(次時)は平均台運動に取り組むことを再度確認していた。
38		レ				<p>○ 挨拶</p> <p>整列、着座する。</p>	
40							

マネジメント (M) : 出席, 用具準備 インストラクション (I) : 先生の師範場面, 全体, 個別
 認知学習 (A1) : 知識を教える場面, 教え合い 運動学習 (A2) : 準備運動, 動きづくり, 練習, ゲーム
 学習非従事 (0) : いずれかにレ点を打って, 具体的な活動を記入。

や従来型の取り組みそれぞれから示唆を得るためのものであり、日本における地域の違いと同様ととらえ分析を行っている。訪問校において、各地区の文化、経済、社会的背景の中で最善を尽くされた実践であり、それらを否定するものではないことを申し添えておく。

文 献

- Condello, G., Mazzoli, E., Masci, I., Fano, A.D., Ben-Soussan, T.D., Marchetti, R., and Pesce, C. (2021) Fostering Holistic Development with a Designed Multisport Intervention in Physical Education. *Int J Environ Res Public Health*, 18(18):9871.
- Kirk, D., and MacPhail, A. (2002) Teaching Games for Understanding and Situated Learning: Rethinking the Bunker-Thorpe Model. *Journal of Teaching in Physical Education*, 21(2):177-192.
- Ministry of Education (2014) Curriculum Guidelines of 12-Year Basic Education General Guidelines. <https://www.naer.edu.tw/eng/PageFront>, (参照日 2023年9月28日).
- 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領解説保健体育. https://www.mext.go.jp/content/1407073_07_1_2.pdf, (参照日 2023年9月15日).
- 文部科学省 (2017a) 小学校学習指導要領解説体育. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiedfile/2019/03/18/1387017_010.pdf, (参照日 2023年9月15日).
- 文部科学省 (2017b) 中学校学習指導要領解説保健体育. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afiedfile/2019/03/18/1387018_008.pdf, (参照日 2023年9月15日).
- Moston, M., and Ashworth, S. (2010) Teaching Physical Education First Online Edition, 2008. https://spectrumofteachingstyles.org/assets/files/book/Teaching_Physical_Edu_1st_Online.pdf, (参照日 2023年9月28日).
- 西村奏咲・清水忠 (2021) テキストマイニングを用いたアンケート解析. *薬学教育* (5) :1-5
- OECD(2019) Making Physical Education Dynamic and Inclusive for 2030, In-ternational Curriculum Analysis, OECD Future of Education 2030. OECD Publishing, Paris.
- Sato, Y. (2022) The 2022 International Conference for the 10th East Asian Alliance of Sport Pedagogy 'Sport, Education and Sustainability ~ East Asian Perspectives for Japan.
- 鈴木理 (1994) 教授スタイルの連続体モデル (Moston, M.) の分析. *スポーツ教育学研究*, 14 (1) :17-27.
- 鈴木理 (1996) 指導スタイル論からみた「楽しい体育」の学習過程. *スポーツ教育学研究*, 16 (2) :83-93.
- 臺灣教育部體育署 (2013) 102 體育運動 政策白皮書 <https://www.sa.gov.tw/Resource/Other/f1519884683203.pdf>, (参照日 2023年9月28日).
- 臺灣教育部體育署 (2015) 102 學年度學校體育統計年報 <https://www.sa.gov.tw/Resource/Ebook/Files/UnZips/636321080633194844/files/assets/common/downloads/publication.pdf>, (参照日 2023年9月28日).
- 高橋健夫 (1994) 体育の授業を創る. 大修館書店: 東京, pp.355-426.